

挑戦意欲のある子どもに育てよう

岡山大学大学院教育学研究科教授

高橋敏之



人を育てることに、近道はありません。その時々
の年齢に応じて、時機を逃さず、コツコツと地道
に働きかけることが求められています。幼児教育の
現場においても、知育・徳育・体育・美育・食育な
ど、バランスの良い育ちに気を配りながら、子ども
の成長を促すための粘り強い取り組みが為されてい
ます。同時に、教育的な取り組みには検証と見直し
も大切です。「子どものために」と思ってやっている
ことが本当に望む結果に繋がっているのか、折に
触れて再確認する必要があります。例えば、子ども
のやる気を引き出すために、褒めて自信を持たせる
ことは良いことだと考える人は多いでしょう。しか
し、褒めることで逆に子どもの意欲を抑制してしま
う場合があることはあまり知られていません。

私達は、日々の養育や教育の中で、子どもに対し
て「早いね」「上手だね」「良くできたね」「それで
合っているよ」などと言ってしまうがちです。する
と子どもには失敗や間違いを回避したい気持ちも芽
生えます。その気持ちが育ち過ぎると、失敗や間違
うことを恐れて物事に挑戦するのを尻込みしてしま
う事例を生むことがあります。何事にも挑戦しなけ
れば、失敗と間違いを完全に回避することはできま
すが、それでは当初の教育の目的とは真逆の結果を
招くこととなります。L.G. カッツ (1998) は、「教
師と子どもの関係が、その子どもの行為とその出来
具合に支配される傾向があるのではないかと指摘
しました。確かに褒めることは大切ですが、行為の
達成や成功、出来映えだけを第一義に考えず、遅か
ったり、下手だったり、失敗したり、出来が悪かっ
たり、間違ったりすることにも多くの学びがあるこ
とを私達大人が忘れないようにしたいものです。

同様の問題として、他にも気にかかることがあり
ます。長年、幼児教育の研究者として子どもの様子
を見てみると、「～してもいいですか」という許可
を求める言葉をよく聞きます。それ自体はごく普通
の光景ですが、時に失敗しないことを最優先する余
り、自分で考えて判断するのを初めから放棄してい
るかのように、子どもが細かく頻繁に教師の指示を
仰ごうとする場面に遭遇すると、本当にこれで良い
のかなと少し心配になります。一人の教師が多数
の子どもの教育する実践現場では、学校全体や学級
を適切に管理する上での確かな指示は必要です。た
だし、度が過ぎると子どもの依存心を強くするだけ
で、自立に向けた育ちを抑制することにも繋がります。
現在の教育に、子どもに失敗させない、もしくは失
敗を許さない傾向がないか、振り返って反省する必
要がありそうです。

「失敗は成功の母」。年齢に関わらず、失敗した時
こそ、その原因を突き止め、改善していけば、より
大きく成長することができます。物事は失敗から学
ぶことが多いのですが、大人の側に子どもの失敗を
許容する余裕が無くなっているのかも知れません。
そういう環境では、次第に子どもは萎縮して、意
欲的に取り組む姿勢を維持することが難しくなり
ます。失敗しないように、ことごとく大人が先に手
を打ってしまうのは、子どもから成長の機会を奪
うことに他なりません。まずは、子どもの頃から成
功も失敗も含めた豊かな直接体験を数多くさせるこ
とが、必要ではないでしょうか。人が生きていく上
で、失敗に動じない心の強さも不可欠です。子ども
が様々な体験を糧にして、生涯学び続ける姿勢を持
つ人に育ててほしいと心から願っています。